宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

旧南海道跡・西三谷中遺跡

2022年3月
高松市教育委員会
株式会社住宅環境工房

例　　言

1　本書は宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、旧南海道跡・西三谷中遺跡を収録したものである。

2　発掘調査地及び調査期間、調査面積は以下のとおりである。
調　査　地：高松市三谷町字西三谷中
発掘調査期間：令和3年1月4日～5日
調　査 面 積：約54㎡

3　発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、費用は事業者である株式会社住宅環境工房が負担した。

4　発掘調査は事業者である株式会社住宅環境工房及び高松市並びに高松市教育委員会の三者で協定を結び、現地調査及び整理作業は地方自治法第180条による補助執行により、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課が実施した。発掘調査は同課文化財専門員　香川将慶・高上拓、同課会計年度任用職員　磯崎福子が担当した。

5　本書の執筆は第3章4節は会計年度任用職員上原ふみ・香川、それ以外は香川が担当し、編集は香川が行った。

6　本調査で得られた資料はすべて高松市教育委員会で保管している。

7　標高は東京湾平均海面高度を基準とし、方位は座標北を表す。

8　各挿図の縮尺について、土器は1/4、遺構は各図に示している。

9　遺構の略記号は以下のとおりである。
SD：溝　　SK：土坑　　SP：ピット

10　本報告書の挿図として、高松市都市計画図の1/2500の地図を一部改変して使用した。

11　遺物の年代観については以下の文献を参考にしている。
備前焼：重根弘和　2003「中世備前焼に関する考察－形態と変遷と年代について－」
『山口大学考古学論集』山口大学考古学研究室

12　本調査を実施するにあたり下記の関係者の御協力を得た。記して厚く謝意を表する。
株式会社古川組

目　次

第 1 章　調査の経緯と経過
第 1 節　調査の経緯・経過 …… 1
第 2 節　調査日誌抄 …… 1

第 2 章　地理的・歴史的環境
第 1 節　地理的環境 …… 2
第 2 節　歴史的環境 …… 2

第 3 章　検出した遺構・遺物
第 1 節　調査方法と遺構の呼称 …… 5
第 2 節　試掘・確認調査の内容 …… 5
第 3 節　基本層序 …… 7
第 4 節　確認した遺構・遺物 …… 7

第 4 章　まとめ
第 1 節　主な遺構 …… 11
第 2 節　旧南海道跡の痕跡について …… 11

挿　図　目　次

第 1 図　周辺遺跡位置図（S=1/10,000）..... 4
第 2 図　各調査（試掘・本調査・立会調査）位置
　　及び試掘調査遺構断面図・基本土層図.. 6
第 3 図　本調査確認遺構平・断面図 8
第 4 図　本調査出土遺物実測図..... 9
第 5 図　立会調査確認遺構平・断面図..... 10
第 6 図　旧南海道跡遺構関係図（S=1/1,500）.. 12

挿　表　目　次

第 1 表　本調査出土遺物観察表 …… 12

写　真　図　版　目　次

写真図版 1
　本調査 SD01 検出状況（南から）
　本調査 SD01 完掘状況（南から）

写真図版 2
　本調査 SD01 断面状況（南から）
　本調査 SP01 完掘状況（南から）
　本調査 SP01 断面状況（南から）
　本調査 SP02 完掘状況（南から）
　本調査 SP02 断面状況（南から）

写真図版 3
　立会調査 SD04 検出状況（北から）
　立会調査 SP01 断面状況（東から）
　立会調査 SD01・02 検出状況（南西から）
　B 断面状況（南から）

第1章　調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯・経過

事業者である株式会社住宅環境工房（以下、事業者）が当該地に宅地造成工事を計画したことに伴い周知の埋蔵文化財の包蔵状況の照会があった。事業地の一部が「旧南海道跡」に含まれており、遺跡の遺存状況を確認するため、事前に試掘調査が必要であることを事業者へ伝えた。その後、事業者から高松市教育委員会（以下、市教委）へ試掘依頼があったため、令和元年11月11日～15日にかけて確認・試掘調査を実施した。その結果､事業地全体で埋蔵文化財の包蔵状況を確認したことから､香川県教育委員会（以下、県教委）に報告した。その後、周知の埋蔵文化財包蔵地「旧南海道跡」と遺跡の性格が近接する「西三谷中遺跡」と類似することから両遺跡の範囲変更を行うとともに、事業者に対して事業実施前に、周知の埋蔵文化財における保護措置が必要であることを伝えた。

その後、事業者から市教委に令和2年7月7日付けで文化財保護法第93条に基づく発掘届出があり、文化財課は県教委へ進達した。その後、県教委から7月7日付けで防火槽設置工事は「発掘調査」、水路･側溝・給水管・擁壁・公園フェンス基礎の工事については「工事立会」の行政指導があった。これを受け事業者と文化財課で協議を行い、遺跡に影響がある範囲について事前の発掘調査と工事立会を行うことで双方合意した。これに際し、事業者（発注者）、高松市（管理者）、市教委（監督者）の三者協定を結び、令和3年1月4日～5日の期間に浄化槽部分を発掘調査（以下、本調査）を実施し、令和2年10月21日～令和3年6月30日に擁壁や水路設置部分等の工事立会（以下、立会調査）を実施した。

第2節　調査日誌抄

令和3年1月4日　重機掘削、遺構検出・掘削。

1月5日　遺構掘削、写真撮影、図面作成。発掘調査完了。

令和3年7月1日より遺物の洗浄や実測、写真撮影、図面整理を実施し、令和4年3月末にこれらの整理作業を終了し、発掘調査報告書を刊行した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は香川県の中央東寄りに位置する。南は讃岐山脈を隔てて徳島県と接し、北は瀬戸内海に面し、女木島・男木島・大島などの瀬戸内の島々も市域に含んで岡山県と対峙する。市域の中心に位置する高松平野は讃岐山脈からの河川の堆積作用によって形成された沖積平野である。東は屋島や立石山、西は五色台山塊や鷲ノ山が平野を囲うように分布し、中央には石清尾山・浄願寺山・室山・稲荷山からなる石清尾山塊が位置している。これらの山々は、浸食に弱い花崗岩の層に抵抗の強い安山岩や凝灰岩層が堆積することで形成されたメサ、ビュート型の様相を示している。平野を形作る河川として、東から新川･春日川･詰田川・御坊川・香東川・本津川が挙げられる。特に香東川は平野形成に最も大きな影響を及ぼし、現存の春日川以西はこの香東川によって形成された扇状地であると考えられている。現在の香東川は、寛永年間に高松藩奉行の西嶋八兵衛によって改修された流路であり、それまでは石清尾山塊南部から平野部中央を流れる流路が存在していた。御坊川や詰田川が現在でもその名残をとどめているほか、空中写真等や発掘調査により自然流路の痕跡が確認されている。

気候は温暖な瀬戸内式気候で、年間降水量が約 1,000㎜と少ない地域である。古くから干ばつ、水不足に悩まされ、平地に造られた皿池や、旧河道を使った開析谷池が数多く築かれてきた。昭和 50 年には香川用水ができ、農業や工業用水として使われている。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

高松平野と周辺丘陵部では雨山南遺跡、久米池南遺跡、またＡＴ火山灰上層でナイフ形石器が出土した中間西井坪遺跡が挙げられる。調査地周辺では石清尾山塊南西部に位置する中森遺跡において、石器ブロックが確認されたほか、片山池窯跡群でも瀬戸内技法を示す翼状剥片が出土している。当遺跡周辺では横内東遺跡で片縁調整ナイフ形石器が出土し、その一端を垣間見ることができる。

縄文時代

高松平野での縄文時代の遺跡数は、他の時代と比較して多くない。井手東Ⅰ遺跡では現地表下約 70cm でアカホヤ火山灰堆積層が確認され、中期における高松平野形成過程を垣間見ることができる。当遺跡東側には縄文時代早期の有舌尖頭器が出土した十川東・平田遺跡、遺物包含層から縄文時代後期の遺構・遺物を確認した川島本町遺跡や川島本町山田遺跡が所在する。

弥生時代

縄文時代と比べ、弥生時代の遺跡数は大幅に増加し、高松平野の各所に確認できる。当遺跡周辺では川島本町山田遺跡において、前期～中期の可能性のある溝や後期の遺物が出土した溝等が検出されている。後期になると、弥生時代後期に開削された溝を検出した川島郷遺跡や後期後半の土器が大量に出土した宮ノ浦遺跡が所在する。

古墳時代

当地域を代表する古墳として三谷石舟古墳が挙げられる。後円部上に刳抜式石棺が露出し、推定約 88 mの前方後円墳である。後期になると横穴式石室の平石上 2 号墳や石舟池古墳群、雨山南古墳群等が築造される。

また、古墳以外の遺跡は中期前半には三谷三郎池西岸窯跡で初期須恵器の窯跡が確認されている。集落遺跡については、古墳中期～後期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡を多数検出し、首長居館が存在したと考えられる萩前・一本木遺跡などが挙げられる。

古代

高松平野では現存史料である「弘福寺領讃岐国山田郡田図」を手がかりとした発掘調査や地割の様子から条里地割が広範囲に広がり、周辺では三谷中原遺跡、空港跡地遺跡等で条里境界線と思われる遺構が確認されている。また、三谷中原遺跡では旧南海道跡の側溝と推定される東西方向に平行する溝 2 条が検出されている。

中世

中世前半には横内東遺跡で 13 ～ 14 世紀の集落が確認され、方形区画と想定される溝の内側に掘立柱建物や井戸跡が検出された。中世後半になると中世城館が造営され、三谷氏の三谷城跡や三谷氏の家臣とされる鎌野氏・由良氏の鎌野城跡、由良城跡、由良山城跡が築かれた。

＜引用・参考文献＞

磯崎福子　2021『川島郷遺跡』高松市教育員会

小川賢・上原ふみ　2012『横内東遺跡』高松市教育委員会

香川県教育委員会　1984「三谷三郎池西岸窯跡」『香川県埋蔵文化財年報　昭和 58 年度』

梶原慎司　2021『宮ノ浦遺跡（第 2 次)』高松市教育委員会

金田章裕　1992「高松平野の条里と弘福寺領讃岐国山田郡田図」『讃岐国弘福寺の調査　弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会

川畑聰　2005『雨山南古墳群』高松市教育委員会

川畑聰ほか　2007『平石上 2 号墳　石舟池古墳群』高松市教育員会

中西克也　2021『萩前・一本木遺跡Ⅲ』高松市教育委員会

波多野篤　2017『川島本町遺跡』株式会社ベルモニー・高松市教育委員会

舩築紀子・森原奈々　2017『萩前・一本木遺跡Ⅰ』高松市教育委員会

森格也　2007『家の浦遺跡・川島本町山田遺跡』香川県教育員会

森下英治　2019『三谷中原遺跡』香川県教育員会

1. 西三谷中遺跡　2. 旧南海道跡　3. 彦作遺跡　4. 加摩羅神社古墳　5. 横内東遺跡　6. 宮ノ浦遺跡　7. 平石上 1 号墳　8. 平石上 2 号墳　9. 平石上 3 号墳　10. 平石上 4 号墳　11. 平石上 5 号墳　12. 平石上 6 号墳　13. 瘤山（小日山）1 号墳　14. 瘤山（小日山）2 号墳　15. 日山山頂古墳　16. 日山山頂経塚　17. 雨山山頂古墳　18. 北山 1 号墳　19. 北山 2 号墳　20. 北山 3 号墳　21. 雨山南 1 号墳　22. 雨山南 2 号墳　23. 雨山南 3 号墳　24. 雨山南 4 号墳　25. 雨山南 5 号墳　26. 雨山南 6 号墳　27. 雨山南 7 号墳　28. 雨山南 8 号墳　29. 雨山南 9 号墳　30. 雨山南 10 号墳　31. 雨山南 11 号墳　32. 雨山南 12 号墳　33. 雨山南 13 号墳　34. 雨山南遺跡

第 1 図　周辺遺跡位置図（S=1/10,000）

第3章　検出した遺構・遺物

第1節　調査方法と遺構の呼称

本報告書では本調査及び造成工事に伴う立会調査の成果を収録している。本調査は防火槽設置箇所を対象に実施した。遺構面まで重機掘削した後、人力で遺構掘削を行った。その後、平板による平面測量、断面図作成、デジタルカメラによる写真撮影を行った。立会調査については掘削深度が遺構面に達する工事を対象に実施した。後述する試掘・確認調査や工事立会は手測による測量であるため本調査との遺構の相関配置等に誤差が生じている可能性はある。

また、本報告書では各調査で確認した遺構の呼称を試掘・確認調査は試SD●、本調査は本SD●、立会調査は立SD●というように呼称する。

第2節　試掘・確認調査の内容

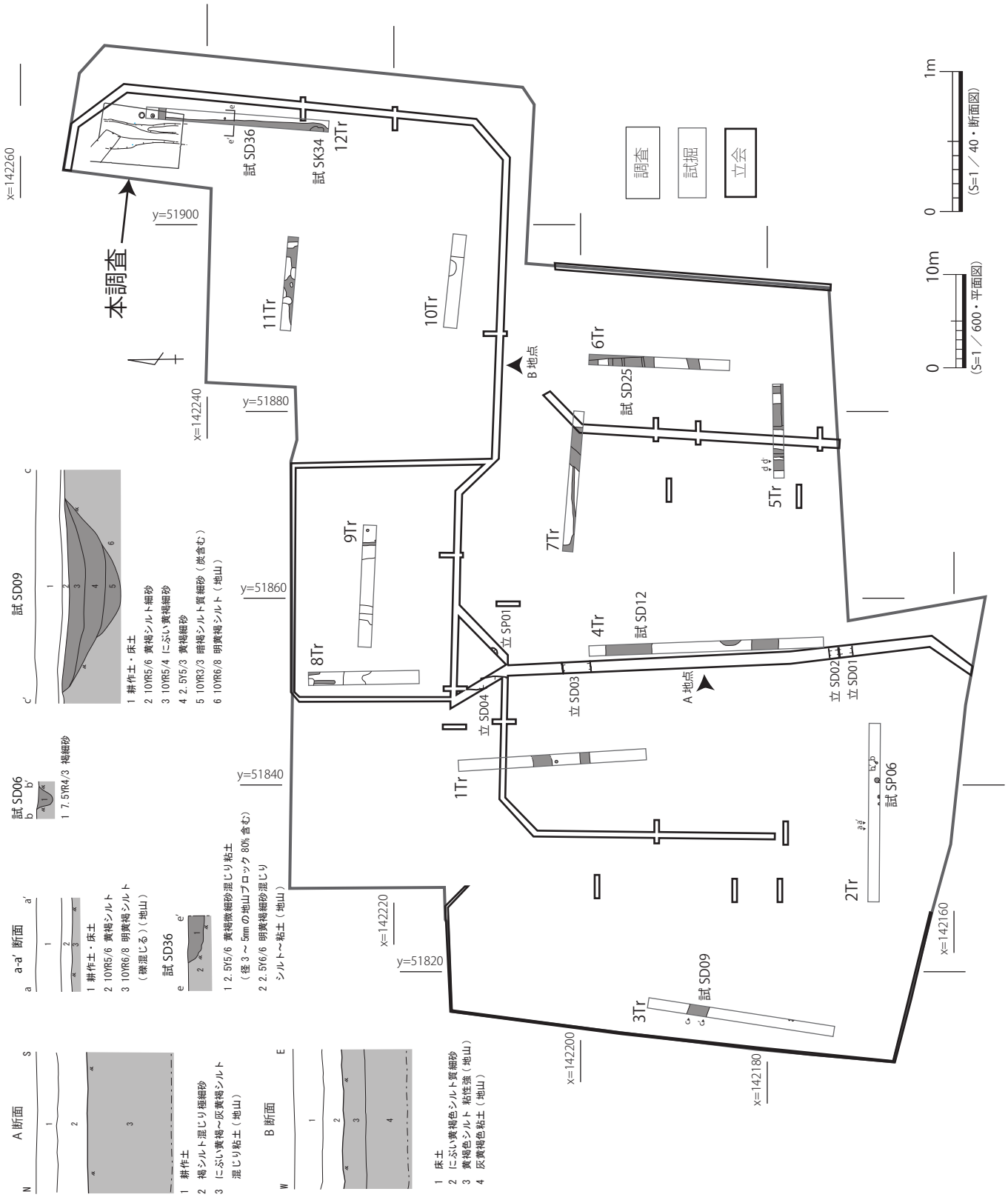
試掘･確認調査の結果は既に報告されているが（香川2020)､その概要について記載したい。調査の結果、遺構の粗密はあるが､事業地全体で古代・近世の遺構・遺物が確認された（第2図）。

遺物が出土し､古代に位置付けられる遺構の埋土はにぶい黄褐色～褐色で細砂～シルトのものが多く､地山ブロックを含むものもある｡遺物は出土していないが､類似した埋土の遺構は同時期と推測される｡今回の調査で旧南海道跡の推定ライン上に位置しており、これに関連すると考えられる遺構は試SD09・12・25である｡

試SD09は3トレンチで確認した。旧南海道跡推定ライン上に位置し､幅は約2.1m､深さは約0.6mである｡埋土は大きく2層に分かれ（第2図）､1層は第2・3層でにぶい黄褐色系の細砂層で､2層は第4・5層で暗褐色のシルト質細砂で炭化物を含む｡摩滅して詳細は不明だが、土師質の土器片が少量出土している｡試SD12は4トレンチで確認し､幅約5.0m､深さ約0.3mである｡埋土はにぶい黄褐色の細砂層である。埋土から土師器が出土している｡この溝跡は6トレンチで確認した試SD25と同軸であることから一連の溝跡と考えられる｡試SD25は幅約6.0m､深さは0.2m以上である｡埋土は褐色のシルト混じり細砂層である｡

その他に遺物が出土して年代が想定できる遺構は試SP06、試SK34が挙げられる。試SP06からは土師器と須恵器が出土し、時期は古代と考えられる。試SK34から土師器が出土しているが、試SD36と関連性がある本SD01が室町時代前半～中頃と推定されるため、この時期以降と考えられる。

試SD09・12・25は旧南海道跡の推定ラインに近接することから、旧南海道跡に伴う遺構の可能性がある｡埋土の状況は1層目ににぶい黄褐色細砂が堆積しており､同一遺構の可能性もあるが､試SD09と試SD12・25の軸がずれることや溝の幅や深さが異なることから、試SD09と試SD12・25は別遺構の可能性がある｡試SD09と試SD12・25が別遺構であった場合､旧南海道跡の南北それぞれの側溝となる可能性もあるが､軸が異なることから今回の調査では復元が難しいと考えられる｡また､試SD09は近隣で実施し



第 2 図　各調査（試掘・本調査・立会調査）位置及び試掘調査遺構断面図・基本土層図

た試掘・確認調査で検出したSD01と幅や堆積状況が近似することから、同一遺構の可能性がある（波多野2020）（第6図）。西側で検出したSD01は古代～中世にかけての溝と推測され、試SD09も同時期と推測される。この試掘・確認調査では旧南海道跡と関連する可能性がある東西方向の溝2条分を確認している。しかし、今回の調査（東側）では平行した2条の溝を検出出来なかったことから試掘・確認調査では旧南海道跡に関する遺構と断定できなかった。

第3節　基本層序

B断面を参照すると第1層は表土、第2層は近世の遺物が混ざる褐色シルト～細砂を確認する(第2図)。場所によっては第2層は灰色の床土になる。第3層は黄褐色シルトの地山を確認し､他の調査地点(A断面、立SD03）等でも黄褐色シルト～粘土の地山を確認していることからこの層が遺構面となる。また、試掘a-a’断面では地山に礫を含むことを確認している。

第4節　確認した遺構・遺物

今回の本調査及び立会調査で明らかになった遺構は溝5条、ピット2基である。

(1) 本調査で確認した遺構・遺物

本調査は防火水槽部分を対象とし、溝1条、ピット2基を確認した。本SD01は室町時代前半～中頃の溝と推測される。

本SD01（第3・4図）

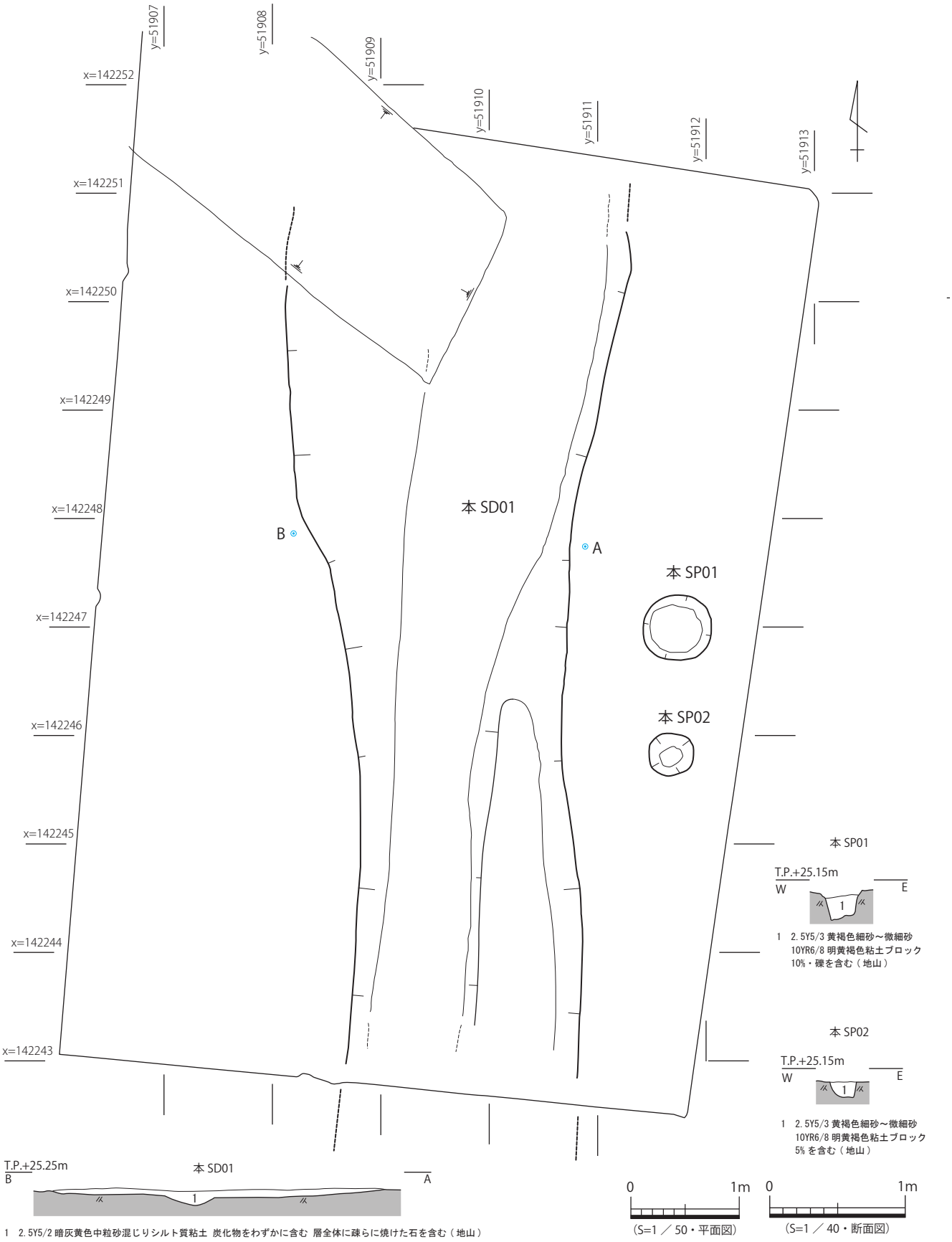
調査区中央に検出した南北方向に延伸する溝である。主軸方位はN-15° -E、検出面の標高は約25.2mである。長さ約7.0mを検出し､幅約2.1m､深さ約0.1mを測る。断面形状は浅い皿状に中央が段落ちである。埋土は単層で暗灰黄色中粒砂混じりシルト質粘土。焼けた石や炭化物を含む。配置図ではSD01は試SD36はずれているが、手測による誤差を想定すると同一線状にあり、埋土の土質も類似することから同一遺構の可能性がある。

遺物は土師質土器（1・2）・陶器（3～5）が出土した。1は土師質土器焙烙である。頸部から緩やかに外反する口縁部を持ち、体部内面は指頭ないし板状工具で強くナデられ、平滑になっている。体部外面はわずかに指頭圧痕が認められる。2は土師質土器杯である。器壁は薄く、体部の外傾が著しい。底部は回転ヘラ切りと思われる。3は陶器碗の体部である。灰色の胎土に透明釉が施される。外面は剥離が著しい。4は備前焼の甕である。口縁端部は折り曲げ、形成された玉縁にヨコナデを施し、楕円形を呈す。小片であるため特定はできないが、重根編年ⅢＢ～Ⅳ A-2頃と推測される。5は備前焼の壺である。肩部。内面は上位から回転ナデを重ねた指頭痕が見られ、外面はヘラ描きによる2条の沈線が施される。

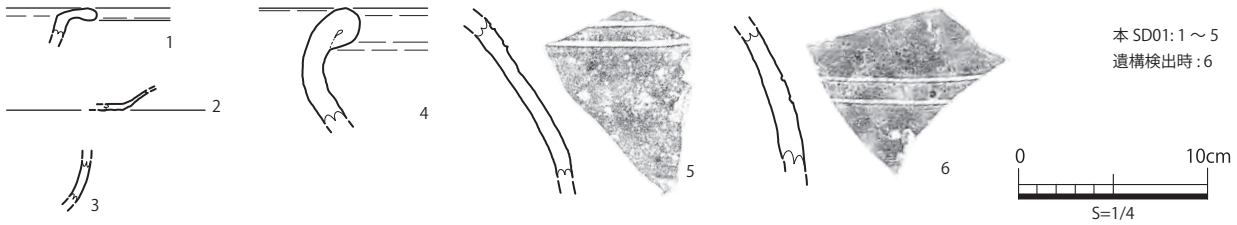
本SD01の年代は4から室町時代前半～中頃と推測される。

本SP01（第3図）

調査区中央部の東寄りに検出したピットである。検出面の標高は約25.1mである。平面形状はほぼ円形



第 3 図　本調査確認遺構平・断面図



第 4 図　本調査出土遺物実測図

を呈し、直径約 0.6m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は底部が歪な逆台形である。埋土は黄褐色細砂～微細砂、粘土ブロック・礫を含む。

遺物は検出していない。

本 SP02（第 3 図）

前掲の本 SP01 の南側で検出したピットである。検出面の標高は約 25.1m である。平面形状はほぼ円形を呈し、直径約 0.4m、深さ約 0.1m を測る。断面形状は筒状である。埋土は黄褐色細砂～微細砂、粘土ブロックを含む。

遺物は検出していない。

その他、遺構検出時に 6 を検出した。6 は備前焼の壺の肩部である。内面は上位から回転ナデを重ねた指頭痕が見られ、外面はヘラ描きによる 2 条の沈線が施される。重根編年Ⅳ A-2 に比定される。

(2) 立会調査で確認した遺構

造成工事に伴い立会調査を実施し、溝 4 条、ピット 1 基を確認した。

立 SD01（第 5 図）

調査地南側で検出した東西方向に延伸する溝である。埋土は褐灰色シルト混じり細砂である。幅約 1.4m で深さは掘削していないため不明である。

遺物は出土していない。

立 SD02（第 2・5 図）

調査地南側で検出した東西方向に延伸する溝である。埋土は褐灰色細砂である。幅約 1.0m で深さは掘削していないため不明である。前述した立 SD01 と埋土の特徴が近似することから同時期に埋没した可能性がある。

遺物は出土していない。

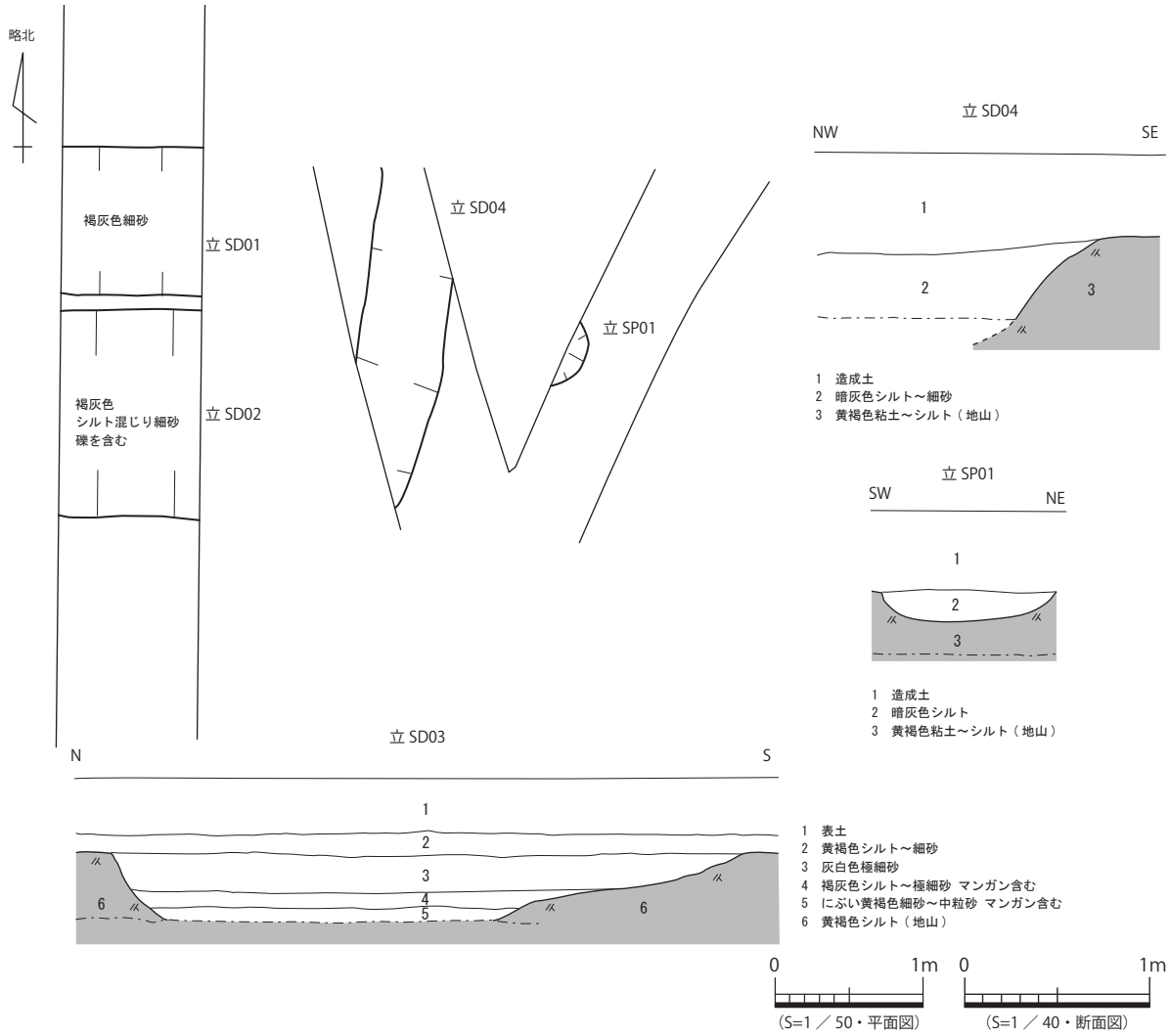
立 SD03（第 5 図）

調査地中央で検出した溝である。断面観察で溝を確認した。延伸方向は東西方向又は南東から北西方向と推測される。断面での検出規模は幅約 3.9m、深さ約 0.4m である。埋土は 3 層（第 3 ～ 5 層）確認し、上層は灰白色極細砂、中層は褐灰色シルト～極細砂、下層はにぶい黄褐色細砂～中粒砂である。

遺物は出土していない。

立 SD04（第 5 図）

調査地北側で検出したほぼ南北方向に延伸する溝である。幅は約 0.6m で確認した深さは約 0.3m である。



第 5 図　立会調査確認遺構平・断面図

埋土は暗灰色シルト～細砂である。

遺物は出土していない。

立 SP01（第 5 図）

調査地北側で検出したピットである。直径約 0.5m で深さ約 0.15m である。埋土は暗灰色シルトである。

遺物は出土していない。

＜引用・参考文献＞

香川将慶　2020「32. 旧南海道跡・西三谷中遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報－令和元年度国庫補助事業－』
高松市教育委員会

重根弘和　2003「中世備前焼に関する考察－形態と変遷と年代について－」『山口大学考古学論集』
山口大学考古学研究室

波多野篤　2020「14. 旧南海道跡・西三谷中遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報－令和元年度国庫補助事業－』
高松市教育委員会

第4章　まとめ

第1節　主な遺構

試掘・確認調査、本調査、立会調査で検出した遺構で年代が求めることができる遺構は試SD09、試SP08、本SD01である。試掘SD09は年代不明の土師器が出土しているが、近隣の試掘調査（波多野2020）（SD01）で古代から中世頃の土師器・須恵器が出土しているため同様の時期が求められる。試SP08は土師器・須恵器が出土しており、古代と推定される。本SD01は室町時代前半～後半と推測される。

その他、検出した遺構は年代を特定することはできないが、埋土の特徴が類似することから古代から中世にかけての遺構と推測される。

第2節　旧南海道跡の痕跡について

試掘調査から本調査・工事立会までの一連の調査で2条分の道路側溝や路床面等の旧南海道跡と明確に評価できる痕跡は明瞭に確認できなかったが、旧南海道跡の道路側溝の一部と推測される溝を検出したためその可能性について記述したい。

まず、旧南海道跡に関する研究は金田章裕氏によってまとめられている（金田1999）。当該地の旧南海道跡を形成した角度は概ね約11度西上がりであることが見込まれ、この研究に基づく、周知の埋蔵文化財包蔵地「旧南海道跡」の範囲が第1図のとおりである。

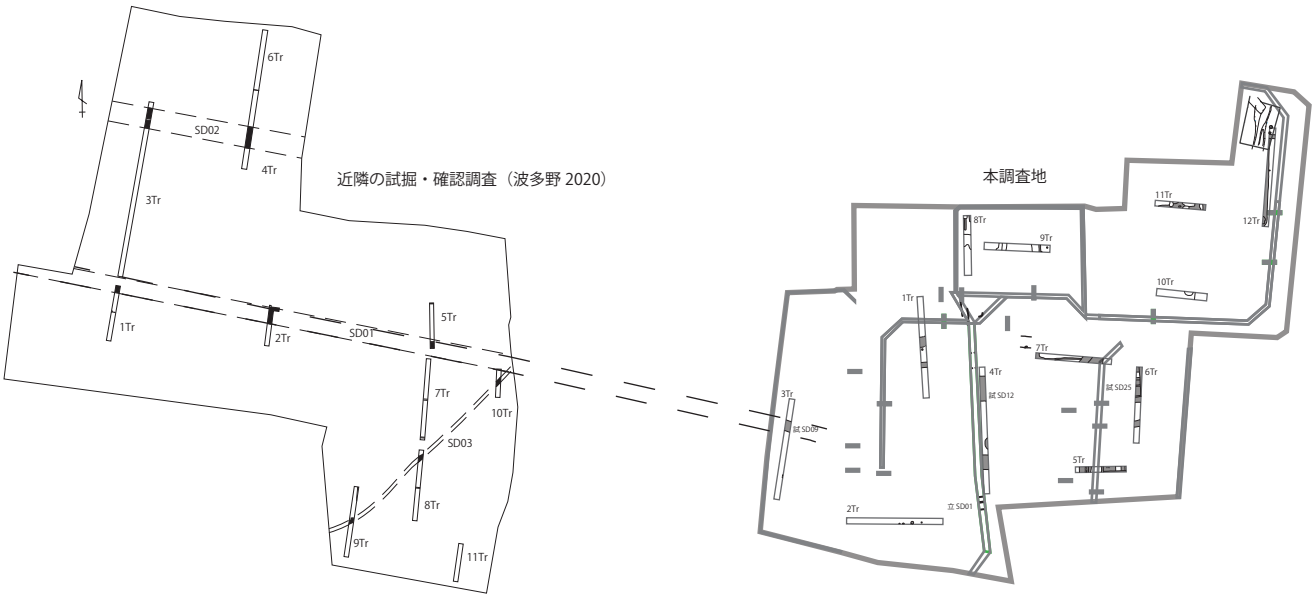
一連の調査で旧南海道跡の道路側溝と推測される遺構は試掘調査で確認した試SD09である（第6図）。局所的な検出であるため断定はできないが、試SD09は近隣で実施された試掘調査で確認した溝（SD01）と埋土や規模、延伸方向が同じであることから同一遺構である可能性がある（波多野2020）。また、想定ラインより若干南に下がるが、立SD01も試SD09と同様の規模、埋土であることから関連性があると推測される。

今回検出した溝は、旧南海道跡想定ライン上で片側部分のみしか確認できていないことや、硬化面等の他の道路遺構に関する痕跡が見られないため旧南海道跡の一部という評価を断定することは困難と考えられる。しかし、検出した溝はこれまでの研究に基づいた想定ライン上に位置し、埋没時期が古代～中世と推測されることから、旧南海道跡の関連性について否定しきれないと考えられる。今回の調査は範囲が局所的であることや、後世の削平等により検出できなかった可能性もあることから、今後、周辺地域の発掘調査や研究の発展により再考が求められるものである。また、第3章第2節で記述した試SD12・25は旧南海道跡の側溝と推測すると報告しているが、軸や埋土が若干異なるのでこちらも周辺の調査等で再評価する必要があると考える。

〈引用・参考文献〉

波多野篤　2020「旧南海道跡・西三谷中遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報 - 令和元年度国庫補助事業 - 』高松市教育委員会

金田章裕　1999「高松平野における条里地割の形成」『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市教育委員会



第 6 図　旧南海道跡遺構関係図（S=1/1,500）

第 1 表　本調査出土遺物観察表

報告書番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴［外］［内］	色調［外 / 胎土］［内 / 釉調］ 胎土 焼成
1	本 SD01	土師質土器 焙烙	－ － ［1.5］	口縁部は頸部から緩やかに外反する。 ［外］指頭圧 ［内］指頭ないし板状工具によるナデ	［外］10YR1.7/1 黒 ［内］10YR3/2 黒褐 普：1㎜程度の長石・黒色粒を含む 良好
2	本 SD01	土師質土器 杯	－ － ［1.0］	体部は外反する。 ［外］ナデ、底部回転ヘラ切りか ［内］ナデ	［外］10YR8/4 浅黄橙 ［内］10YR8/3 浅黄橙 普：0.5㎜以下の長石・赤色粒を含む 良好
3	本 SD01	陶器 碗か	－ － ［2.3］	ほぼ均等な厚みで球体を呈す。 ［外］施釉、剥離著しい ［内］施釉	［胎土］7.5Y4/1 灰 ［釉調］透明 細
4	本 SD01	備前焼 甕	－ － ［6.2］	玉縁状の口縁部外面は強くナデられ、扁平な長楕円の断面形状を呈す。 ［外］回転ナデ ［内］回転ナデか	［胎土］2.5Y7/1 灰白 ［釉調］自然釉 細
5	本 SD01	備前焼 壺	－ － ［8.5］	肩部にヘラ描きの直線文が 2 条施される。 ［外］回転ナデ、ヘラ描き ［内］回転ナデか	［胎土］N5/ 灰 ［釉調］自然釉 細
6	遺構検出時	備前焼 壺	－ － ［7.6］	肩部にヘラ描きの直線文が 2 条施される。 ［外］回転ナデ、ヘラ描き ［内］回転ナデか	［胎土］N7/ 灰白 ［釉調］自然釉 細

写真図版

写真図版 1

本調査 SD01 検出状況（南から）

本調査 SD01 完掘状況（南から）

本調査 SD01 断面状況（南から）

本調査 SP01 完掘状況（南から）

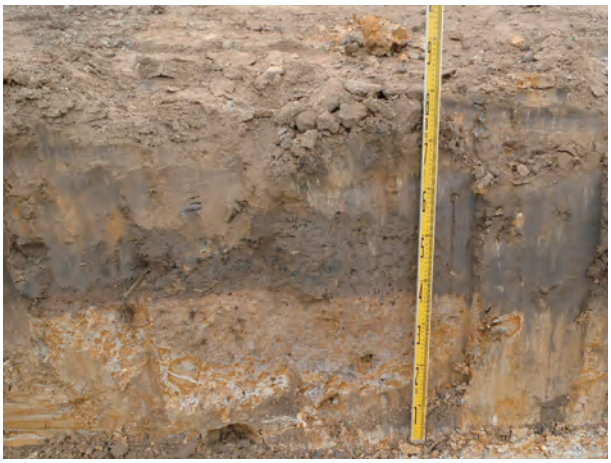
本調査 SP01 断面状況（南から）

本調査 SP02 完掘状況（南から）

本調査 SP02 断面状況（南から）

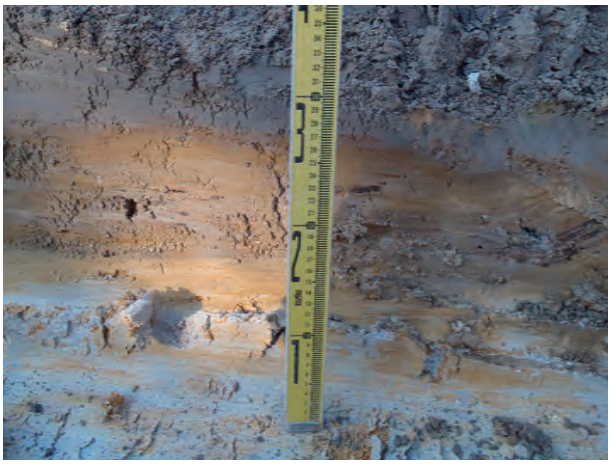
写真図版 3

立会調査 SD04 検出状況（北から）



立会調査 SP01 断面状況（東から）

立会調査 SD01・02 検出状況（南西から）



B 断面状況（南から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	きゅうなんかいどうあと・にしみたになかいせき
書名	旧南海道跡・西三谷中遺跡
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第230集
編著者名	香川　将慶
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2022年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
きゅうなんかいどうあと・にしみたになかいせき 旧南海道跡・西三谷中遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 みたにちょう 三谷町	37201		37° 17′ 44″	134° 4′ 43″	発掘調査 2021・1・4 ～1・5 工事立会 2020・10・21 ～ 2021・6・30	40㎡ 350㎡	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
旧南海道跡	道路跡	古代？	溝	土師器	
西三谷中遺跡	集落跡	古代～中世	溝、土坑、ピット		
		室町時代	溝	備前焼、陶器、土師質土器	

要約	発掘調査の結果、室町時代前半～中頃にかけての溝を検出した。また、旧南海道跡の道路側溝と推測される溝を検出した。

宅地造成工事に伴う発掘調査

旧南海道跡・西三谷中遺跡

令和 4 年 3 月 31 日

編 集　　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目 8 番 15 号
発 行　　高松市教育委員会
　　（株）住宅環境工房
印 刷　　（有）中央ファイリング